世界名作劇場

小公女（プリンセス）セーラ

『幸せの素敵な小包』

第 43 話

提供　ハウス食品工業

制作　日本アニメーション
　　　フジテレビ

脚本中西隆三

登場キャラクター（第四十三話「幸せの素敵な小包」）

セーラ・クルー

ミンチン院長

アメリア先生

ベッキー

ピーター

ロッティ

アーメンガード

ラビニア

ジェシー

ガートルード

モリー
ジェームス
ドナルド
（ジャネット）
（母親）
（ラムダス）

シーザー（猫）
メルの一家（ネズミ）

1 雪の降る街

雪の降る街行き交う馬車や通行人、荷車。

2 その街角

首からマッチのケースを提げたセーラが通行人に呼び売っている――

セーラ「マッチはいかがですか……風が吹いても、仲々消えないマッチ、ふたつで半ペニーです……」

だが、降る雪に先を急ぐ通行人は、無視して通り過ぎるばかり――

セーラ、凍え切った両手を口許にあて、ハアッと息をかけて温める。

また元気を出して通行人に呼びかけはじめる――

セーラ「マッチはいかがですか……雪の中でもよく点くマッチ、ふたつで半ペニーです……」

×　×　×

また馬車が一台、通りかかる――

3

走るその馬車の中

窓外を見ていたドナルドが、突然振向いて、同席している母親やジャネットに叫ぶ――

ドナルド「見て、ママ！……いつかのあの子が、マッチ売りをしてるよ！」

驚いて窓外を見る母親とジャネット――

4

フラッシュ

童話のマッチ売りの少女（18話）――に、

ドナルドの声「ほら、ママがお話してくれたマッチ売りの少女にそっくりの女の子だよ」

5 街角

通行人に呼ぶセーラ――

セーラ「マッチはいかがですか……」

6 走る馬車の中

ドナルド「ね、ママ。あの子、本当にマッチ売りの少女になっちゃったんだよ」

茫然と顔を見合せる母親とジャネット。

ドナルド「ね、可哀想だから買ってあげようよ……（御者台に叫ぶ）

あ、馬車をとめてよ！」

7 路上

走って来た馬車が停る――
扉が開くなり、雪の中へ飛び降りて来るドナルド、急いで来た道をとって返す。

8 街角

通行人に呼びかけているセーラ――
セーラ「マッチはいかがですか……」
そこへドナルドが駆け戻って来る。
ドナルド「やあ、やっぱり君だったんだね！」
セーラ「まあ……あなたは……」

9

フラッシュA（18話より）

セーラにコインを押しつけるドナルド。

ドナルド「さ、これをあげるよ。なにか買って食べるといいよ」

10

フラッシュB（　話より）

港で出合うセーラとドナルド――

ドナルド「うん……パパの話だと、その人のお友だちが亡くなって、たった一人のお嬢さんの行方が判らないんだって……それで顧問弁護士のパパが代わりに探しに行くのさ」

11

街　角

ドナルド「ぼく、馬車から君を見つけて、マッチを買いに来たんだ

よ。はい、これだけ」
ドナルド、コインを出す——
セーラ「まあ、有難う……」
ドナルド「いいのさ……」
ドナルド、セーラからマッチを四ツ受取ると、
ドナルド「じゃ、また買いに来るから、頑張ってね」
セーラ「ええ、有難う……」
ドナルド、ぱっと馬車の方へ駆けて行く。
セーラ「あ、気をつけて！」

12 路上

駆け戻って来るドナルド、停っていた馬車に乗り込む
——
背後を見定めた御者が、鞭を振り、馬車は、雪の中を

走り出る――

13
街角

雪の中で――ほっと微笑で見送っているセーラ。その時、一方から――

声「お嬢さん……！」

はっと振返るセーラ――

雪まみれのピーターが駆け寄って来る。

ピーター「やあ、探しましたよ……こんな雪ん中で商売してたんですか」

セーラ「ええ、やっと少し売れた所よ」

ピーター「そいつはいいけど……お嬢さん、ちょいと厄介な事が起っちまってるんです」

セーラ「えッ、厄介な事って⁉」

ピーター「話は道々します。とにかく俺んちへ戻って下さい。さ、早く」

ピーター、セーラの首からマッチのケースを外しとる。

セーラ「ピーター……！」

14 ピーターの家の前

降りしきる雪の中に――辻馬車が一台停っている。

急いで帰って来るピーターと、セーラ。

15 同・家の中

ピーターに続いて、入って来るセーラ、はっと立つ――

ピーターの両親と対していた後姿の女客が振返る――

アメリアである。

アメリア「あ、セーラさん……！」

セーラ「アメリア先生……！」

アメリア「心配してたのよ、あなたの事を……院長先生がベッキーを問いつめて、やっとあなたが、ピーターの世話でここに居る事が判って……」

セーラ、茫然とアメリアを見る――

アメリア「実はね、セーラさん。院長先生があなたに、学院に戻るようにと……」

セーラ「院長先生が……？」

セーラの顔に不安の色が走る――

アメリア「（頷く）それでこうして、私がお迎えに来た訳なの」

セーラ「でも……」

セーラ、ピーターの両親たちを見る。

困惑して立尽している両親――

アメリア「ね、セーラさん、お願い。あなたが帰って下さらないと、

この私が院長先生に……さ、一緒に帰って下さるわね」
泣顔になるアメリア——
セーラ、凝然とピーターを見る。

ピーター「お、お嬢さん……」

16 同・表

降り続く雪の中へ—— エミリーと父母の写真額を抱いたセーラが、アメリアに抱えられるように出て来る。
続いて飛び出して来るピーターと、杖をついた心配そうな父親と母親——
セーラとアメリアが待たせてあった辻馬車に乗り込む
——
ピーター、思わず駆け寄って叫ぶ——

ピーター「お嬢さん！……なにかあったら、きっとここへ逃げ帰っ

て来るんですよ！」

同時に御者が鞭を入れ、いななきと共に馬車は走り出る――

ピーター「お嬢さん……！」

立尽して見送るピーターと両親――その姿が雪の中にかすんで行く。

17 ミンチン女学院・表

降りしきる雪――

走って来た辻馬車が停り、アメリアとセーラが降り立つ。

アメリア、セーラの肩を抱いて、玄関口へ――

18 同・玄関ホール

入って来るアメリアとセーラ。

19 同・一階廊下

アメリアに続いて、来るセーラ——

声　「お嬢様！」

セーラ、はっと立停る——

廊下の角に、石炭バケツを手にしたベッキー。

セーラ「ベッキー……！」

ベッキー、急いで石炭バケツを床に置くと駆け寄る

ベッキー「（低く）お許し下さいまし。私、お嬢様の居所を問いつめられて、とうとう……」

セーラ「（優しく）いいのよ、ベッキー」

セーラ、ふっと見る——

一方の廊下に、固まって覗っているラビニア、ジェシ

ー、ガートルード以下の女生徒たち。その中から、ロ
ッティがもぐり出て来る。

ロッティ「（泣声）セ、セーラ・ママ……」

セーラ「ロッティ……！」

続いてアーメンガードが出て来る。

アーメンガード「セーラ……」

セーラ「アーメンガード……！」

その時、院長室前で振返ったアメリアがセーラを呼ぶ
——

アメリア「さ、セーラさん、院長先生がお待ちですよ」

セーラ「は、はい、アメリア先生……」

セーラ、アメリアの方へ行く——

ベッキー「お嬢様……！」

心配そうに見送るベッキー——ロッティ——アー
メンガードと、冷笑するラビニア、ジェシー、ガート

ルードたち。

20 同・院長室

アメリアに続いて入って来るセーラ。

アメリア「お姉様……セーラさんを……」

デスクで背を向けていたミンチンが、ジロリとセーラに振返る――

ミンチン「お帰り……随分探させて、余計な手数をかけさせてくれたものだね」

セーラ、慄然とミンチンを見る。

ミンチン「ま、その件はいずれシメシをつけるつもりだけれど……」

ミンチン、立上るとセーラの前に来る。

ミンチン「処で、お前を連れ戻したのは、別に、私がお前を許したからじゃない事位、見当はついているだろうね」

セーラ、みつめて微かに頷く。

ミンチン「よろしい……お前を迎えに行った理由は……それだよ」

ミンチン、傍に顎をしゃくる――

傍のテーブルの上に――置かれている小包。

アメリア「あなたが居なくなったあとで、誰かが玄関に、そっとその小包みを……」

セーラ、茫然と小包を見る――

ミンチン「宛名が書いてある。読んでごらん」

セーラ、小包に近づき、確める――

「To the Little Girl in the right-hand attic」の宛名。

セーラ「(読む)屋根裏の……右側の部屋の少女へ………」

ミンチン「そう……屋根裏の右側の部屋と云えば、お前が寝起きしていたあの部屋だよ」

アメリア「ベッキーは左側ですもの。明らかにあなた宛に届いた小

ミンチン「ま、勝手に処分する訳にも行かないだろうからね……な
　　　　包なのよ。それで、あなたを探して……」
　　　　にが届いたんだい？」
セーラ「判りません……」
ミンチン「ワカラナイだって？」
アメリア「じゃ、送り主は？」
　　　　セーラ、首を振る――
ミンチン「心当りもないと云うのかい」
セーラ「は、はい……」
　　　　ミンチン、アメリアと顔を見合せる。
ミンチン「どうやら、知っていても、私には云いたくないと云う顔
　　　　付きだね」
　　　　はっと見るセーラ――
　　　　ミンチン、デスクからナイフをとる。
　　　　セーラ、ギョッとなる――

ミンチン「開けてごらん」

ナイフを突き出す――

茫然と見返すセーラ――

ミンチン「なにをしてる！……私の前で、開けてみせるんです！」

セーラ「は、はい……」

セーラ、ナイフを受取ると、置かれた小包の紐を切り出す――

見守るミンチンとアメリア――

小包の紐を切り終ったセーラ、包装を開ける――現われる化粧箱。

セーラ、その箱の蓋を取る――

思わず息を呑むセーラ――

アメリア「お、お姉様……！」

アメリアもミンチンも、驚いて箱の中を覗き込む。

――ぎっしり詰った贈物の品々。

ミンチン「まあ……」

ミンチン、急いで箱から品々を摑み出す。

——美しい少女服——可憐な外出靴——可愛い

スリッパ——きれいな靴下——洒落れた下着

アメリア「お、お姉様……！」

夢中で、次々に摑み出すミンチンを、アメリア、啞然と見守る——

セーラも、茫然と立尽して見守る——

21
同・廊下

ラビニア以下の女生徒たちが、ドア外で群って様子を窺っている——

（中ＣＭ）

22 同・院長室

テーブルやソファに拡げられた服や靴など小包の品々――

手にとって嘆声を発するアメリア――

アメリア「まあ、なんて素敵な仕立なんでしょう……それにお姉様、靴下も下着も、みんな本物の絹ですわ」

ミンチン「セーラ……」

はっと見るセーラ――

ミンチン「これでも、誰がこれを送ったのか心当りもないと云い張るのかい」

セーラ「は、はい……」

ミンチン「それじゃ、仕方がない。この贈物が、本当にお前あてに送られて来たのかどうか、はっきり確める必要がありま す。さ、着てごらん」

驚いてミンチンを見るセーラ――

ミンチン「本当にお前あてなら、寸法も合う筈です……もし合わなかったら、お前のものじゃないとして処分するから、そのつもりで……さ、早く着てお見せ！」

茫然とミンチンを見るセーラ――

23

同・廊 下

窺っていたラビニアたちが、気配にパッとドアを離れる――

ドアが開き、服や靴を抱えたセーラが出て来る――

ラビニアたちと眼が合ったが、静かに応接室のドアに消える。

見送って顔を見合せるラビニアたち。

24 同・院長室

腕を組んで歩き廻るミンチン――

小包の箱を漁っていたアメリアが、紙片を摑み出す――

アメリア「お姉様……手紙が入ってますわ」

ミンチン「手紙だって?」

アメリア「ええ、お読みします……（読む）これは普段着です。必要な服はあとでまた送ります……」

ミンチン「それだけかい」

アメリア「ええ、それだけですわ……でも、お姉様、あんな高そうな服を普段着だなんて、送り主はきっと相当なお金持ですわ」

ミンチン、動揺しはじめる――

アメリア「ね、お姉様。もしかすると、セーラさんには、今まで判らなかった大金持の親類でもいたのでは……?」

ミンチン「なんですって?!」
アメリア「その大金持の親類が、急にセーラさんの居所を知って、それでこんなおかしな方法で、贈物をして来たんじゃないのでしょうか」
ミンチン「まさか……」
アメリア「でも、親類って時々風変りな人がいるものですわ。ことにお金持で独身のおじ様などとなると、傍には子供を置きたがらないクセに、親類の子を遠くから援助するのが愉しみ、なんて人が、よく小説なんかにも……」
ミンチン「馬鹿馬鹿しい。小説の読みすぎです!」
アメリア「でも……」
ミンチン「アメリア!……私たちが今確めねばならないのは、この小包が本当にセーラの所へ来たのかどうかだけです!」
アメリア「は、はい、お姉様……」
その時、廊下に女生徒たちのどよめきと嬌声が聞える

――
はっとドアを見るミンチンとアメリア。

25 同・廊下

院長室ドアが開き、顔を出すミンチンとアメリア、愕然と見る――
応接室から一歩出たセーラを囲んで、ロッティほかの女生徒たち――そのセーラは見違える程美しい服に着がえている。
ロッティ「ステキ！　セーラ・ママ！」
アーメンガード「ほんと、まるでプリンセスよ！」
セーラ「有難う、ロッティ、アーメンガード」
セーラ、はっとミンチンとアメリアに気づき、近づくと優雅に膝をかがめる。

セーラ「これで、よろしいでしょうか、院長先生……」

茫然と顔を見合せるミンチンとアメリア。

アメリア「あつらえたみたいに、ピッタリですわ！」

26 フラッシュ（41話より）

洋服屋の主人が、ラムダス、クリスフォードに——

主　人「お任せ下さいまし。なに、あの子の服でしたら、寸法をとる必要なぞございません。ちゃーんとここに控えてございますから」

クリスフォード微笑——

27 ミンチン女学院・廊下

動揺を押えてセーラに口を切るミンチン。

ミンチン「（猫なで声）セーラさん……」
セーラ「は、はい……」
ミンチン「どうやら、あなたにはとても親切にして下さる方がいるようですねえ」
セーラ「そ、そんな……」
ミンチン「いいえ、話したくなければ、黙っていても結構よ……とにかく、あなたには今まで同様、この学院で暮すことを許してあげましょう」
驚くセーラ、女生徒たち——一方で喜びを押え切れないベッキー。
ミンチン「ベッキー！」
ベッキー「は、はい、院長先生」
ミンチン「ジェームスをお呼び！」
ベッキー「はい、ただいま！」
ベッキー、転がるように地下室へとって返す——

ミンチン「さ、セーラさん、お入りなさい」
セーラ「はい、院長先生……」
セーラ、ミンチンとアメリアに続いて院長室に消える。
見送ってざわめく女生徒たち――
ロッティ「わあい、またセーラ・ママと遊べるんだ！」
アーメンガード「よかったわね、ロッティ」
一方でラビニアに囁くジェシー、ガートルード。
ジェシー「驚いたわね、ミンテンさんのあの変り方……」
ガートルード「きっと、誰かがセーラに遺産でも残してる事が判ったのよ」
ジェシー「それに、あのセーラの高そうな服」
ガートルード「私、セーラにはきっといつか変った事が起ると思ってたわ。だって、あの人自身がすごく変ってるんですもの」
ラビニア「やめてよ。セーラの事でそんなに騒ぐなんて。あの子を

いい気にさせるだけだわ」

ジェシー「だって、ラビニア……」

ラビニア「フン……きっとまた、セーラの前にダイヤモンド鉱山でも現われたんでしょ、幻のね。さ、行きましょ」

ラビニアたち、一方へ――

地下の階段から、ジェームスとベッキーが上って来る。

28 同・院長室

ミンチン「それから、今日はもう台所の仕事はしなくてもいいですからね」

セーラ「はい、院長先生……」

その時、ノックの音――

ミンチン「お入り……」

ドアが開き、ジェームスが入る。

ジェームス「お呼びだそうで……」

ミンチン「あ、セーラさんが今迄通りここで暮す事になったから、屋根裏部屋を住めるようにしておあげ」

ジェームス「へ？……へえ、承知致しました」

怪訝そうに、セーラの姿を見直す――

29 同・三階廊下

眠っていたシーザーが、むっくり起上ってノビをする

――

大工道具を抱えたジェームスと、小包の箱を抱えたセーラが、階段を上って来る。

シーザー、セーラに鳴きすがる――

セーラ「しばらく、シーザー……！」

30

同・屋根裏部屋

入って来るジェームスとセーラ——

ジェームス「フン、勝手に出たり入ったりしやがって、こっちの用事が増えるばっかりだ」

ブツブツ云いながら、テーブルに上ると釘抜きで乱暴に窓の十文字の板を引きはがしにかかる——

見上げたセーラ、箱からエミリーと写真額をとり出すと、ベッドの上に飾る。

板を手に、テーブルを飛び降りたジェームス、壁穴のふさぎ板を荒っぽく引はがす——

ジェームス「さあ、これで元通りだ。文句はあるめえ」

セーラ「す、すみません」

ジェームス、荒く扉を閉めて出て行く。

ほっとベッドに掛けるセーラ——

ふと壁穴に鳴声がして、メルが顔を出す。

セーラ「まあ、メル！……しばらく！」

メルと一家が次々に出て来てセーラを迎える——

セーラ「メル……またあなたたちと一緒にここで暮せるようになったのよ。よろしく」

微笑で語りかけるセーラ—— メルの一家嬉しそうな仕草で応える。

31 同・表（夕景）

降りしきる雪—— 点燈夫がガス燈を点けて行く。

32 同・台所（夜）

モリーとジェームスの前に、ミンチンが来ている——

モリー「な、なんでございますって？……それじゃ、セーラの毛布を返してやれと……」

ミンチン「その通り……毛布ばかりではありません。あなた方がセーラの部屋から取上げた食器類も、全部あの子に返すのです」

ジェームス「ですが、勝手に処分して良いと云われたのは、院長先生で……」

ミンチン「お黙り！……セーラの後ろには、有力な謎の保護者がついている事が判ったんです。毛布も食器類も、いえあの屋根裏の豪華な食事も、きっとその保護者が差入れていたに違いないんです」

茫然と顔を見合せるモリーとジェームス。

ミンチン「いいですね。セーラを今までのようにメイド扱いしてはなりません。判りましたね」

ミンチン、慌ただしく去る――

ジェームス「なんてこった！」

モリー「やれやれ……なんだか知らないけどえらく風向きが変って来たみたいだよ。こりゃ口惜しいけど、院長先生の云う通りにした方が無難そうだね」

舌打ちするジェームス――

33 同・屋根裏部屋（夜）

燃えている暖炉の火――

ジェームスとモリーが、例の毛布と銀の食器類を運び込んでいる。

モリー「さ、これで全部返したからね。もう私たちを恨むんじゃないよ」

モリーとジェームス、出て行く。

茫然と見送るセーラとベッキー。

ベッキー「お嬢様……ようございましたね」
セーラ「ベッキー……」
ベッキー「え……?」
セーラ「私、ずっと考えていたの……私に小包を送って下さった方は、この毛布を下さった方と同じ方なんじゃないかって」
ベッキー「じゃ、あの、魔法の御馳走を届けて下さった……」
セーラ「ええ……私、なんとかして、その方にお礼を云わなくては……」
ベッキー「でも、一体どうやってその方に……」
セーラ「そうだわ……あの小包に、紙とペンが……」
セーラ、急いで小包の箱を探し、可愛い文箱を取り出し、蓋をあける—— 入っているレターパッドやペン、インク壺。
セーラ「私、手紙を書いてみるわ……そしてその手紙をここ（テーブル）に置いておくのよ。うまく行くと魔法使いさんが、

その手紙をあの方に届けてくれるわ」

ベッキー「まあ、すばらしい考えですわ、お嬢様！」

34 同・全景（夜）

降り続ける雪――

セーラのN「その夜、私は、お隣りのクリスフォードさんに……」

35 同・屋根裏部屋（夜）

セーラのN「心からのお礼の手紙を書きました……」

テーブルに向って、ペンを走らせるセーラ――

（O・L）

その手紙がテーブルに置かれている。

ベッドで眠っているセーラ――

×　　×　　×

ふと天窓がそっと開き、音もなく飛び降りて来るラムダス――

セーラの寝顔を見守ったが、テーブルの手紙に気づき、そっと取上げると見る。

セーラのN「もし、明日の朝、この手紙がなくなっていたら……その事を心の中で念じながら手紙を置いたのでした……」

（第43話　終）